

6～7世紀の土器からみた西讃地域

佐藤竜馬

1. はじめに

地方における須恵器生産が定着する6～7世紀には、陶邑窯産とは異なる形態的特徴をもつものが散見される。その中には、陶邑窯産の系譜からの変容形態として捉えられるもののほかに、朝鮮半島を含めた畿内以外の他地域との関わりが想定できる可能性をもつ土器がある。

以下では、特に朝鮮半島産土器との形態的類似が認められる事例を取り上げ、この時期における地域間交流のあり方を考える契機としたい。

2. 母神山黒島林5号墳出土の須恵器台付有段広口壺

母神山古墳群は、三豊平野中央部の東辺を縁取る独立丘陵・母神山（標高92m）に展開する、古墳時代後期を中心とした古墳群である。黒島林支群は、北側のピークから西へ派生する二つの尾根筋に分布しており、5号墳は南側尾根の先端に位置する。墳丘は径約20mの円墳であり、中央に西面する胴張形の横穴式石室（玄室長3.4m、同最大幅1.9m）をもつ。石室は盗掘・破壊されており、基底部を残す程度であったが、玄室・羨道・墓道から多数の土器（須恵器・土師器）のほか、銅地金張耳輪1、トンボ玉1、ガラス丸玉1が出土している。また周溝からも、須恵器壺・甕を主体とした遺物が出土している。

本稿で紹介する須恵器台付壺（資料1）は、墳丘南西側（SW区トレンチ）の周溝から出土したものであるが、詳細な出土状態については「須恵器大形甕の口縁部・体部片が3～4個体分、壺片が10数点出土した。そのうち、台付壺がほぼ完形に復元できた」と報告されている^{註1}。これ以上の詳細な記述はないが、墓道左側前面の周溝からの出土であるため、「供献されたものか、或は墓前祭祀に使用されたものが故意に破碎され、溝状部に捨てられたものなのか、などと推考する」という報告書の想定は妥当であろう。

全高20.8cm、口頸高5.6cm、脚台高4.0cm、口径12.7cm、頸基部径9.1cm、体部最大径17.4cm、脚基部径6.4cm、脚端部径11.1cmを測る。①直立する頸部から短く外反・屈曲して段を作った後に直線的に外傾する、二重口縁状の口頸部、②やや上位に最大径をもつ算盤玉形の胴部、③口頸部を天地逆転させたような段を伴う脚台部、の3つの部位に分節される。

口頸部は無文であるが、外面に回転ナデ調整に先行する縦位の櫛目が認められる。おそらく器面調整の一環で施されたものであり、ハソウ等の壺瓶類口頸部の調整技法と共通する。頸部には内面全体と外面基部に強い回転ナデの痕跡が認められ、口縁部内面から口縁端部、口頸部外面に連続する回転ナデよりも後出し体部上端部と連続する

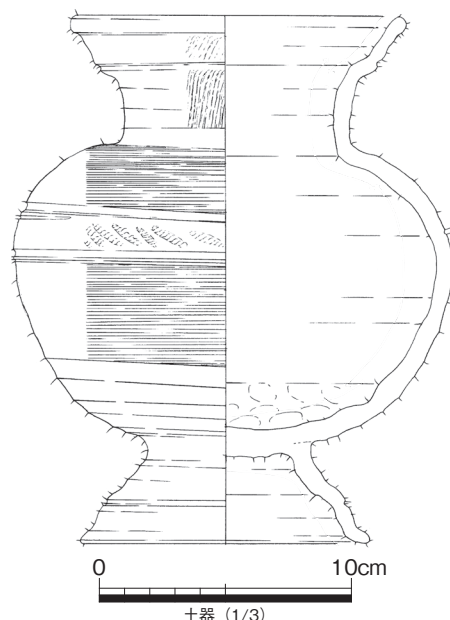


図1 母神山黒島林5号墳出土
須恵器台付有段広口壺（資料1）

ことから、体部への接合に際して施されたと考えられる。口頸部は、体部とは別作りと見てよいであろう。口縁部と頸部の境をなす段には、沈線が1条入れられる。

胴部は上面（肩部）と下面（底部）それぞれに、ほぼ同径の突出気味の平坦面を伴う。底部内面には押圧に伴う凹凸が認められ、底部から体部を成形した際の押圧、もしくは当初は平坦な底部を平丸底に成形するために押し出した痕跡の、いずれかの工程に伴うものと見られるが、対応する外面側で回転ヘラ削りが施されていることからすれば、後者の可能性が考えられる。外面の調整痕として最も先行するのは、ほぼ全面にわたって施されたカキ目であり、その後に最大径の部位に文様と、底部に回転ヘラ削りが施されている。後2者の先後関係は明確ではないが、胴部をロクロ盤から切り離す前に施文されたことと見られることから、施文→回転ヘラ切り→（半乾燥）→回転ヘラ削り、の順が考えられる。文様は、最大径の部位とその上側に1条ずつ沈線が引かれ、沈線の間のカキ目を回転ナデで消去して文様帯を形成し、そこに斜位（左上がり）の刺突文が連続的に施される。沈線はロクロ回転を利用して施されるため、圏線のような重複部分が認められるが、意図的に圏線あるいは2条単位の沈線を作出したものではない、と判断される。

脚台部は口頸部と基本形を同じくするが、一回り小振りであること、また脚柱部（頸部に相当）で直立する箇所が相対的に短く、全体に外開きに

広がりながら裾部との境の段に至るところに、細かな差異が認められる。しかしこのことは、脚台としてはむしろ通有な形態であることから、逆に口頸部における頸部の直立というところに、この資料のもつ形態的特徴が見出されると考えてよいであろう。脚柱部と脚裾部との間には、沈線が1条引かれてやや不明瞭な段を強調している。

胎土は比較的緻密で、径1.5mm以下の白色砂粒（長石）や褐色粒を多く含む。焼成は全体に良好であり、器面は暗灰色ないし暗灰黒色を呈し、断面と脚台内面は淡灰色に発色する。

以上が資料1の特徴であるが、石室内出土の須恵器蓋杯を見ると筆者編年案^{註2} I期古相・中相の2者が認められ、いずれに対応させ得るかが問題となる。I期古相の基準資料である久本古墳（高松市）・青ノ山1号窯跡（丸亀市）での台付長頸壺を見ると、脚台部の形態や体部文様帯の構成が資料1と共通している。また、SW区トレンチでもともに出土した甕（報告書9 - 5）の口縁部形態や頸部のヘラ描き斜線文は、高瀬・三野窯跡群の瓦谷窯跡の資料に近似しており、同窯の須恵器はI期古相・中相にまたがるものの量的にはI期古相が主体と見られることからすれば、やはり資料1はI期古相に位置付けられると考えてよいように思う。

ところで、管見の限りで資料1に最も形態・技法の近い事例として、福岡市堤ヶ浦古墳群SK 18出土資料^{註3}（図5）を挙げることができる。両者の算盤玉形の胴部形態は近似しており、外面にカキ目を施すところも共通する。また二重口縁状の口頸部も近似する。異なる点は、頸部がやや外反気味に延びること、体部最大径部に施文しないこと、脚台が段を伴わずにハの字形に開くこと、等を挙げることができる。したがって、3分節の①・②は細かな差異を含みつつ基本形と調整技法は共通し、③は異なることになる。伴出した須恵器蓋杯の特徴から、資料1よりも後出すると見られ、あえて言えばI期新相並行と見ることができ。堤ヶ浦SK 18出土例は、報告書では言及されていないものの、寺井誠氏は「胴部にはカキメが施され、焼成は通常の須恵器と同じであるが、受け口状の口縁や脚部が付くという点は、（中略）新羅の付加口縁台付長頸壺と共通する。須恵器生産の中で器形のみが採用されたのかもしれない」と指摘している^{註4}。資料1に見られる（a）直立する頸部をもつ二重口縁状の形態、（b）算盤玉形の胴部形態、（c）段を伴う脚台部形態、という基本構成の組み合わせは、後述するように讃岐のそれまでの須恵器壺には見られなかった特徴であり、おそらく陶邑窯等の畿内諸窯にもモデルを求めることも難しい。日本の須恵器生産の形態・技法を基盤としつつ、a～cの組み合わせによる全形は新羅土器を意識した可能性を考えておきたい。

3. 母神山黒島林6号墳出土の須恵器直口壺

黒島林6号墳は、前項の5号墳と同じ尾根筋で、5号墳の上方約30mの地点に位置する。墳丘は径16m、高さ2mの円墳であり、中央部に西面する胴張形の横穴式石室（全長6.75m、玄室長3.05

m、同幅1.8m）を伴う。5号墳同様、盗掘による破壊が著しいが、玄室・羨道・墓道から須恵器・土師器、鉄ノミ・鉄斧・鉄鎌、鉄製馬具轡・環・鉸具、鉄鏃・鉄刀・鉄刀子、銅地金張耳環・銀張耳環、水晶製切子玉、グリーンタフ製管玉・碧玉製管玉、琥珀玉・ガラス小玉・ガラス白玉・土玉、滑石製紡錘車等が出土した。

本稿で紹介する須恵器直口壺（図1・2・3）は、資料2が玄門周辺の羨道部、資料3が墓道から出土しており、出土位置は追葬時の移動や掻き出しが想定されている^{註5}。

資料2は、残存高14.4cm、口径11.4cm、頸基部径9.7cm、体部最大径20.8cmを測る。①丸味を帯びて緩やかに張った体部、②対照的に細く絞られてやや長く直立する頸部、③頸部上端から強く外反して端部をツマミ上げ気味に丸く肥厚させる口縁部、④体部上半に間隔を空けて施された2条の沈線、が特徴である。体部上半の沈線は、ロクロ回転を利用して施文されており、下側のそれは圈線状に重複する箇所がある。また頸基部内面には押圧痕が見られ、おそらく別作りの口頸部を接合した際の痕跡と考えられる。内外面ともに回転ナデが丁寧に施されており、薄作りの印象を受ける。胎土には、径2.0mm以下の石英・長石、径3.0mm以下の褐色粒を比較的多く含んでおり、ややザラついた砂質気味の素地であるように見える。焼成は甘く、外面と断面は淡灰白色を呈し、内面は淡黒灰色が斑点状に混じる。

資料3は、報告書では体部最大径部に空隙を挟んで口縁部から底部までを図示しているが、上半

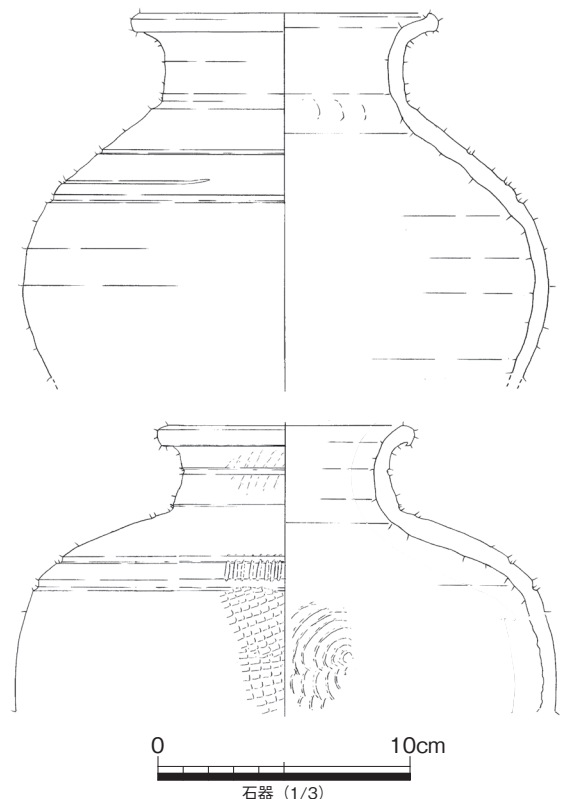


図2 母神山黒島林6号墳出土
恵器直口壺（上段：資料2・下段：3）

と下半とでは成形・調整痕の連続状況にやや疑問があるため、接合関係が明確な上半部のみを取り上げたい。残存高 11.3cm、口径 9.3cm、頸基部 9.1cm、体部最大径 21.4cm を測る。①長く垂直に延びてやや胴長な形態を推測させる体部、②対照的に細く絞り込まれて直立する頸部、③頸部上端から短く外反して端部を垂下気味に丸く肥厚させる口縁部、④頸部中位と肩部に施された沈線、⑤肩部以上の成形・調整後に部分的に施される叩き成形、といった特徴がある。基本的な形態・施文は資料 2 と共通するが、頸部に沈線が施されること、肩部の 2 条沈線を文様帯としてヘラ描き直線文が施されること、体部中位が叩き成形されること等が異なっている。頸部外面には、沈線や回転ナデに先行する、絞り目と見られる縦位の条線が認められるが、僅かな段を隔てた体部上端外面・内面には同様の痕跡は認められないため、別作りの口頸部が接合されているものと思われる。また体部の叩き目・当て具痕は、幅 10cm 程度の限られた範囲に認められる。なお叩き目・当て具痕の原体は、通常の須恵器壺・甕類に見られるパターンと変わるところがない。胎土は緻密で、径 1.0mm 以下の白色砂粒（長石）・黒色粒を含む。焼成は良好で、器面は淡灰色もしくは淡灰褐色、断面は淡灰白色を呈する。

資料 2・3 の帰属時期であるが、石室・墓道内出土の須恵器蓋杯には、先Ⅲ期新相・Ⅰ期古相・Ⅱ期古相 2 の 3 時期が見られるが、Ⅱ期は少量に留まるため除外可能であろう。これ以上の限定は困難であるため、先Ⅲ期新相～Ⅰ期古相の幅で捉えておきたい。資料 2・3 のような形態の須恵器壺は、香川県内での類例に乏しく、重見泰氏による新羅土器分類の F 2～4・Ⅰ形式（第三形式）^{註 6} に近似例を見出し得る。

4. 縁塚 10 号墳出土の須恵器平底瓶

三豊平野南東部、阿讃山脈から派生した丘陵部先端には、多くの後期古墳群が分布しており、縁塚古墳群はそのうちの一群である。既述の母神山古墳群の南約 2km、大野原古墳群の東約 2km の尾根上（標高約 60m）上に位置した。10 号墳は、尾根の最先端頂部にあった径約 15m の円墳である。墳丘中央には、南面する胴張形の横穴式石室（全長 5.25m、玄室長 3.05m、同最大幅 2.0m）が遺存おり、過去の開墾により破壊・削平を受けていたが、盗掘を受けた形跡は認められなかった。玄室と羨道部奥側からは、完形に近い須恵器壺・瓶類を中心に、畿内系土師器杯、銅地金張耳環、翡翠製勾玉、切子玉、琥珀玉、管玉、ガラス白玉・小玉、蛇紋岩製紡錘車、鉄鎌、鉄斧、鉄製鋤先、馬具鉄製辻金具・鉾・鉸具、鉄鏃、鉄刀子が出土した^{註 7}。このうち、玄室中央左側壁際の礫床の上に正置された状態で出土した須恵器平底瓶（資料 4）について、取り上げる。

資料 4 は、全高 15.2cm、口頸部高 3.8cm、口径 7.5cm、頸基部径 4.2cm、体部最大径 12.5cm、底径 7.0cm を測る。①やや寸胴で平底の胴部、②底径よりも小さく絞り込まれて上方にハの字形に外反して開く口頸部、という形態の特徴は、一見す

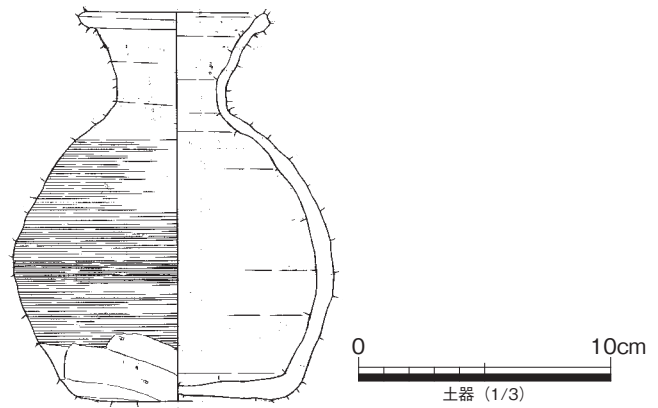


図 3 縁塚 10 号墳出土の須恵器平底瓶（資料 4）

るとⅣ期（9 世紀後半～10 世紀）の十瓶山窯産須恵器にと見紛うが、③やや細長く丸く肥厚させる口縁端部、④カキ目が施された体部、⑤不定方向のヘラ削りを伴う底部外縁、という形態・技法上の特徴は、十瓶山窯産須恵器では認められないものである。上記したような出土状況や、他に 9 世紀以降の遺物が出土していないことを併せ考えると、資料 4 は他の遺物とともに副葬・供献された土器と捉えてよいであろう。石室・墓道・周溝出土の須恵器蓋杯は、先Ⅲ期中相・新相、Ⅰ期新相にそれぞれ帰属させ得るものであり、玄室内の土器も片付けや掻き出しによる二次的移動の可能性を排除できないことから、にわかに資料 4 の時期を決めることはできない。

細かな時期比定は措くとしても 6～7 世紀の幅の中で捉えることが妥当であれば、県内での類例を求めることは難しいと言わざるを得ない。仮に朝鮮半島系土器に類例を求めるとすれば、百濟・新羅のいずれにも基本構成の似た土器はあるように見受けられるが、口頸部がやや長めに開く資料 4 の形態は寺井氏が A 2 類とした百濟土器^{註 8}の方により近い、と判断できるのではないだろうか。寺井氏は日本での出土例から、A 2 類を 5 世紀後半～6 世紀前半としているが、資料 4 はそれよりも下る年代観となる点に、なお検討の要が残されるかもしれない。

5. 母神山千尋 4 号墳出土の耳杯形土師器

母神山塊南側のピーク（標高 70.5m）から北西に延びる尾根筋（千尋神社が存在する）に並ぶ古墳のうちの 1 基である。直径約 16m の円墳と考えられ、北東側に開口する横穴式石室（全長 6.35m、玄室長 3.75m・同幅 1.6m）を主体部とする。石室内から須恵器ハソウ・無蓋高杯、土師器高杯・耳杯、鉄鏃・刀子・鉄斧・鉄鎌、馬具（種類不明）、金銅製（？）腕輪、勾玉・切子玉・算盤玉・ガラス玉・土玉が出土した^{註 9}。

土師器耳杯（資料 5）は、正円より僅かに長い楕円形を呈する杯部の長軸方向両側に、先端が弧を描く撥形の耳部（把手）1 対を貼り付ける。杯部と耳部の外縁は、面取りするように短いピッチでヘラ削りされており、おそらく杯部外面の弱く粗いヘラ削りと一連の調整と考えられる。また、

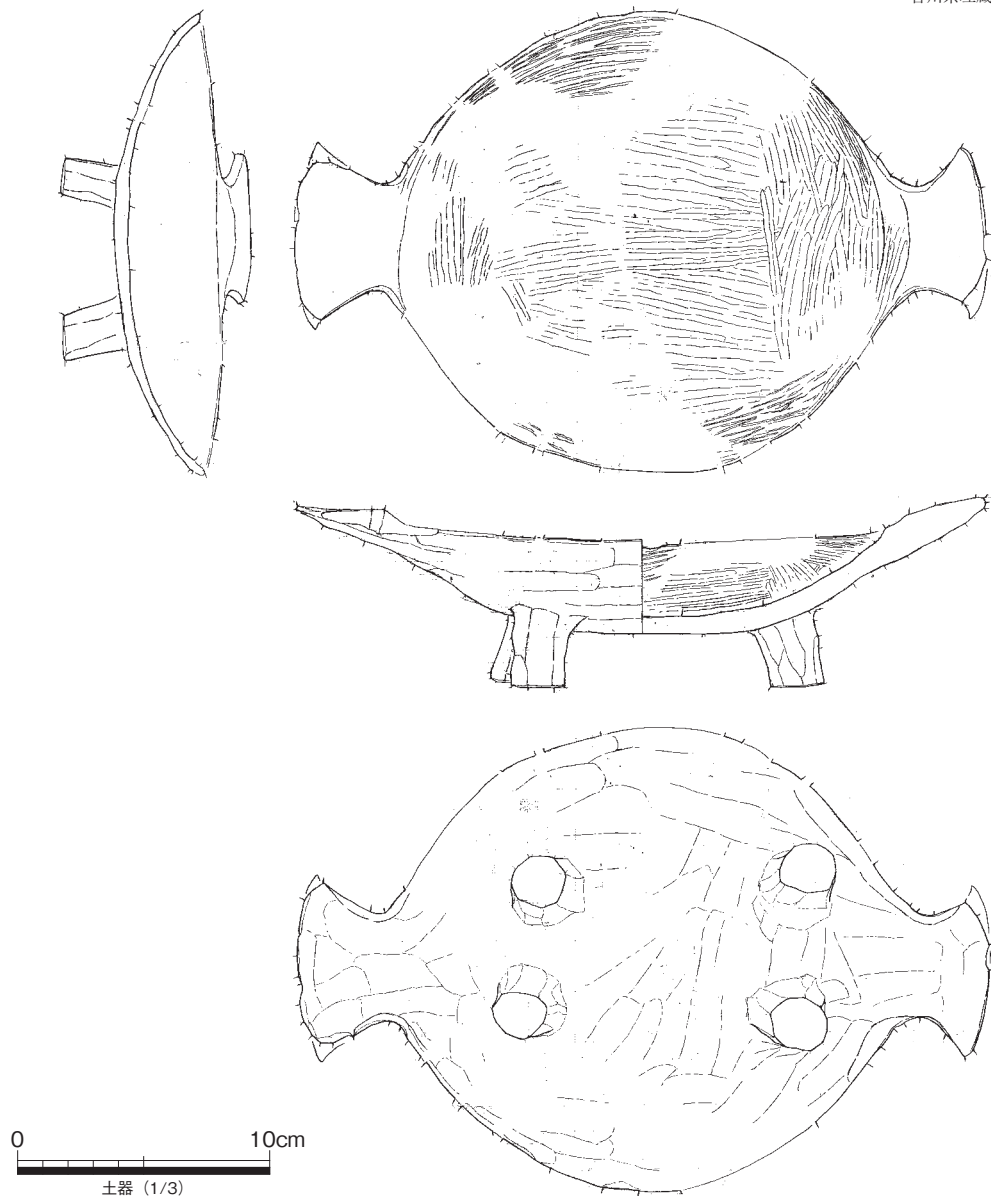


図4 母神山千尋4号墳出土の耳杯形土師器(資料5)

杯部外面には多角柱形の脚部が4個貼り付けられており、脚部の面取りは貼り付け後に行われている。杯部底部内面は主軸方向に、同体脚～口縁部は輪郭に沿って密にヘラ磨き調整され、仕上げられる。

共伴した須恵器を見ると、無蓋高杯は長脚1段透かしであり、ハソウは口縁部の開きが強く、最上段の外傾が強いという特徴があることから、先Ⅲ期古相1～2の幅で捉えられるようである。このうち極めて長い脚部のほぼ全面にカキ目を施す高杯(報告書第12図2)は、北部九州の製品もしくはその影響を受けたものと推測される。

国内における耳杯形土器の存在がかなり限定的であることは、辻川哲朗氏の集成^{註10}を見ると明瞭であり、当例を含め現段階では須恵器7点、土師器2点が確認されたことになる。その系譜については、森浩一氏^{註11}に代表される中国耳杯起源と、辻川氏に代表される国内木器起源の2説に大別できる。今、系譜を詳論する余裕はないものの、

以下の諸点は指摘し得る。

①辻川氏が示した木器槽は長径45～95cmを測り、長径13～35cmを測る耳杯形土器とは明確に異なる法量をもつ。

②耳部を除くと、木器槽は側面の張りが弱く長円形もしくは隅丸長方形平面を呈するものが多く、円形ないし寸詰まりの楕円形を呈する耳杯形土器とは異なる。また、器体から明瞭に括れた基部と、撥形に開く先端部からなる耳部(把手)をもつ事例(三ツ寺I遺跡西濠、長野A遺跡22号土壇出土)は、いずれも5世紀後葉～6世紀前葉の所産であり、耳杯形土器の初現(TK87号窯跡)より後出し、同土器の盛行期にほぼ重なる。

③陶器窯や全国の初期須恵器窯において、木製容器を模倣した明確な事例は、他に見出すことができない。

④中国での耳杯は、先学が指摘するように、木器(漆器)も陶器も楕円形の器体の長側縁に

耳部があるため、日本の耳杯形土器での耳部の位置と90°ずれるように見える。しかし、最古事例のTK 87号窯跡出土資料は、半切した欠損部の復元の仕方にもよるが、耳部を除くとややびつな正円形を呈する。一方、朝鮮半島（中国東北部）の高句麗・集安三室塚古墳（5世紀後半）出土の軟陶耳杯^{註12}は、「中国本土の耳杯とは異なって大型[耳部を除いた長径18.7×短径17.0cm：筆者註]で円形に近」い器体をもっており、かつて森浩一氏が紹介した百済・扶余出土の正円形（径15.4cm）の器体をもつ陶質土器「耳付碗」^{註13}（6～7世紀か）に繋がるような系譜が想定できるかもしれず、TK 87号窯跡出土資料との関連性が注目される。

- ⑤日本での耳杯形土器の成形技法には、以下の2種が考えられる。

(a) 耳部・側縁削り出し TK 87号窯跡出土資料は、口縁部上面及び側縁を切り取るように長いピッチで強く削り出し^{註14}、その後、見込みや外面全体に細かく手持ちヘラ削りを施して仕上っている。耳部と器体との間には接合痕等の不整合な痕跡や器壁の厚味の変化が認められない。おそらく口クロ上で成形された一回り大きな皿形の原形を削り込み（切り取り）、耳部と側縁を成形したものと考えられる^{註15}。他の事例については実見できていないが、ほとんどが同様の成形技法と推測され、TK 87号窯跡に見られた手持ち削り調整は省略されていると見られる。

(b) 耳部貼り付け 千尋4号墳出土資料には、側縁と上面の連続的な削り出し痕が見られない。また、(a)技法のような器体から耳部へと連続した内面の窪みがなく、口縁部上端の屈曲を介して平坦な耳部が水平に延びる。耳部外面は、器体から緩やかに移行しており、粘土が補充されているようである。このことから、同資料は器体に耳部を貼り付けて成形されたものと考えられる。同様な成形技法は、類例には認められない。

なお、中国の陶器耳杯は、耳部も含めて外型成形と推測されるが、朝鮮半島の事例については明確でなく、今後の検討課題である。

以上のようなことを踏まえると、器体の平面形態と寸法に明瞭な差異が見られること、また4脚であることや底が浅いことは、木器特有の形態的特徴とはいえないこと^{註16}から、木器起源説には難がある^{註17}。類例の増加で検証される必要はあるが、中国の耳杯を起源とした焼物が朝鮮半島を経由して日本に伝わり、その過程で基本形と成形技法を変容させた可能性を考えておきたい。

6. 新たな土器形態の定着過程

＜地域に定着する系譜＞

新羅土器との類縁関係が想定される須恵器台付

有段広口壺（資料1）は、同じ形態を陶邑窯では見出すことはできないが、香川県内ではこの系譜を引く可能性をもつ一群の事例が散見される。

I期古相の資料1は、原型と目される新羅土器のイメージを、日本的な形態（脚台形態の口頸部への転用）や調整技法（カキ目）、加飾法（刺突列点文）を応用しつつ、かなり忠実に模倣している。これに次ぐI期中相の諸例（古宮古墳・新宮古墳・宮が尾2号墳・旧練兵場遺跡SX 02）。いずれも二重口縁状の段が資料1よりも緩くなり、頸部が資料1のような直立したものでなく外傾して上方に開くものである。また、資料1で体部の過半に見られたカキ目は、I期中相の諸例には施されていない。これに対して加飾は、口縁部・頸部・肩部に波状文（一部刺突列点文）を施すようになり、資料1よりも施文部位が増している。

鬼無大塚古墳出土資料（I期中相）には、肩部の沈線以外施されない無文のものと、より加飾的なものの2者が存在する。前者は、肩部の2条沈線と肥大化した口頸部から、宮が尾2号墳出土資料の後続的な属性をもつと判断できる。また、後者に施された体部のカキ目や頸部に縦方向の櫛目は、資料1と共通する属性であるが、口縁部外面のヘラ描き格子文や肩部のヘラ描き斜線文は、資料1には見られない。直立する短い口縁部と、その直下に沈線・突帯を伴う形状は、資料1には見られない祖形的な属性と見ることができると、資料1とは別系譜と見なしておきたい。

以上を踏まえ、系統関係を想定した（図5）^{註18}。次第に口頸部のメリハリが甘くなり、口縁部にまで施文するようになる過程は、古墳への供献や水利施設での投棄（祭祀か）での使用に対応して、広範な在地化が進んだことを示唆する。

台付有段広口壺は、新羅土器模倣に始まる新たな形態の創出が、地域内で共有されていく過程を示す事例である。同様な動きは、北部九州（筑前・豊前）における台付碗の生産・普及現象に、より典型的に表れているといえる。

＜単発に留まる事例＞

一方、須恵器直口壺（資料2・3）・平底瓶（資料4）、耳杯形土器（資料5）は、地域内での普及・定着が認められず、単発的ないし一過性の存在に留まるものである。しかしこのことは逆に、外部からの単発的な新形態の参入の機会と、それに対する在地土器生産のリアクションの頻度は、かなり多かったとも言えるのではない。

耳杯形土器は、このことをよく示しているのではないだろうか。全国の類例の中で、陶邑窯産であることが確実、もしくはその可能性が高いものは、3例（TK 87号窯跡・檜尾大塚原4号墳・陶器遺跡）に留まり、本例と八幡山6号墳例は器面調整にヘラ磨きを施すこと^{註19}、また剣坂古墳（兵庫県加西市）の脚部形状と円形透かしが陶邑窯には見られない要素をもつことからすれば、在地の土器工人（土師器・須恵器）が製作した可能性が高く、生産地としては多元的なあり方を示している。6世紀における同様な事象としては、角杯形土器が挙げられるであろう。

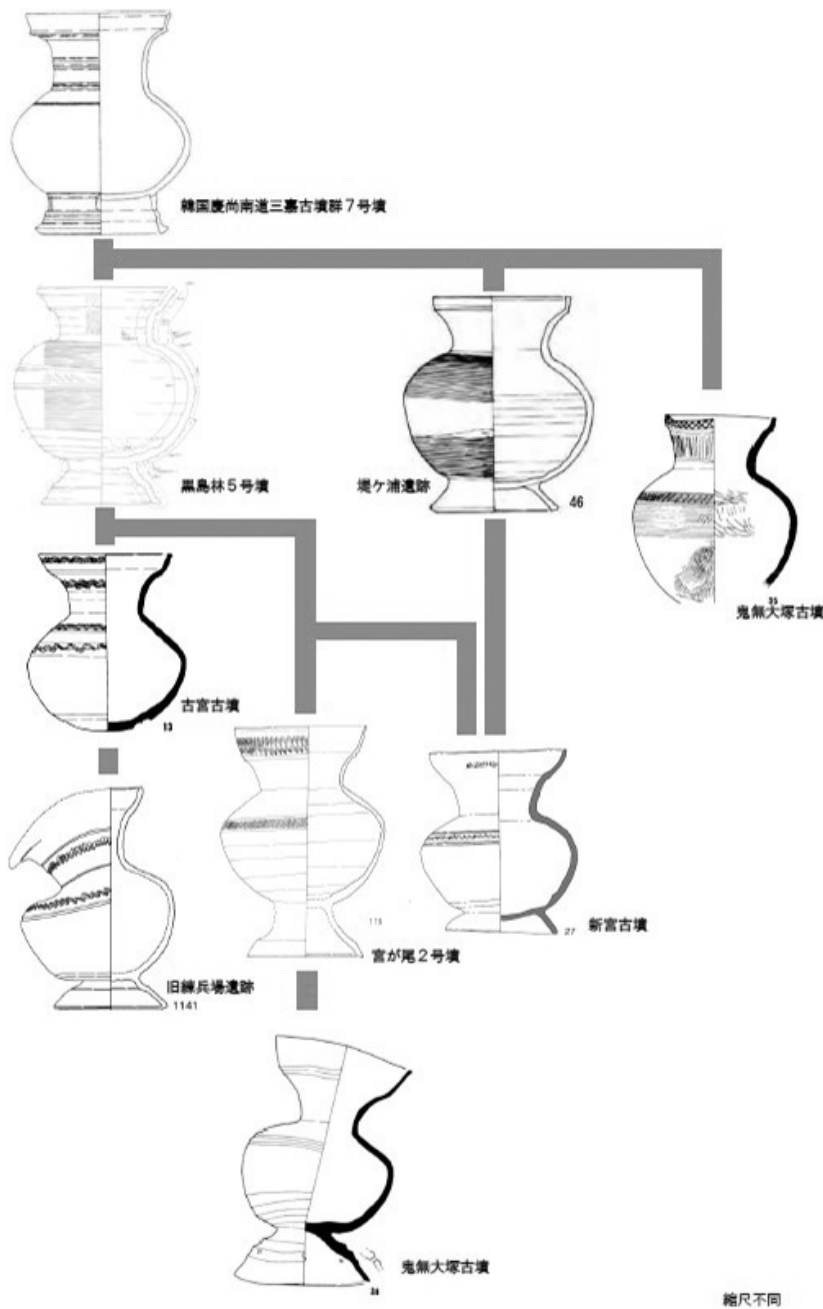


図5 須恵器台付有段広口壺の系譜関係想定図

7. おわりに

6～7世紀における新たな土器形態の出現について、西讃地域の資料を題材に取り上げてきた。香川県内では、こうした動きは西讃地域が目立つように見えるが、中讃・東讃地域についても一層の事例の探索が必要であろう。また、本稿では7世紀代の土器（特に須恵器）の様式転換の前提をなす現象として捉えているが、より幅広い社会全体の変化を示す事象として、他の素材（古墳・集落・灌漑施設、文献史料等）と複合させて理解していく必要性を痛感するものである。

本稿の作成にあたり、丸本啓貴（観音寺市教育委員会）、肥田翔子（堺市博物館）、石松崇（香美町教育委員会）、藤原学（元・吹田市博物館）各氏より、御教示と御協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

追記 5～7世紀中葉頃の土器様相試案

【先Ⅰ期】

須恵器生産の開始をもって先Ⅰ期とする。最初期の須恵器と、小型丸底壺・高杯・甕に布留系の系譜を引く土師器、軟質・硬質の韓式系土器とのセット関係が想定されるが、資料としては良好なセット関係に恵まれない。「楠見式土器」^{註20}と共通する特徴をもつ高松市三谷三郎池西岸窯跡に代表される古相、多量の韓式系土器と須恵器・土師器が共伴するさぬき市尾崎西遺跡S R 06出土資料の新相に分けられる。

【先Ⅱ期】

定型的な須恵器が蓋杯・高杯・壺・器台・甕を中心に充実し、布留系の土師器と共伴する時期。韓式系土器はほとんど認められなくなり、その影響を受けた土師器長胴甕・甌等の器種もほぼ認められない。須恵器には陶器窯製品と目されるものが多く見られるが、三豊市宮山窯跡のように在地窯も確認でき、短脚高杯や多条文様帯を伴う広口壺等の特徴的形態、蓋杯・高杯の焼成不良品から他にも在地窯の存在が想定される。製作技法が安定し、定型的な形態の作巧にシャープさが認められる古相、細部形態にやや鈍重な表現が認められ調整技法にも簡略化の傾向が見られる中相、蓋杯の口径に縮小化傾向が表れ全体・細部ともに当初との差異が明確化する新相、に分けられる。なお新相は、上記傾向の顕在過程で2つに細別（新相1・2）できる可能性がある。布留系の土師器は、新相1までは普遍的に見られるようであるが、新相のうちに消滅するようである。

【先Ⅲ期】
須恵器蓋杯の口径大型化、長脚高杯の出現を指標に始まる。系譜の明確でない土師器高杯（椀形の杯部）・粗製甕を伴う。須恵器蓋杯に見られる全体形状（丸く深手な器体、口径の縮小・拡大傾向）や、細部形態（蓋

天井部外周の突帯・沈線・段、蓋口縁部および身たちあがり端部の段・面・沈線）調整技法（蓋天井部・身底部の回転ヘラ削り範囲と単位幅、内面の当て具痕等の消去）、新旧高杯の共伴関係、といった属性の組み合わせを見ると、先Ⅱ期新相～先Ⅲ期中相は陶邑窯編年TK 47・MT 15・TK 10（・MT 85）型式での変遷観とは必ずしも一致しない。そこに地域色の発現を見ることは可能であるが、同時に陶邑窯編年の型式設定についても再吟味の可能性を残しているように思える。古相は、先Ⅱ期新相2の基本形を引き継ぎつつ、細部形態諸属性を少しずつ欠落させ口径が最大化する蓋杯と、長脚1段透かしの高杯を伴う。蓋杯の形態から、古相1・2に細分される。中相は、全体に扁平な器体と先Ⅱ期的な細部形態の払拭、たちあがりの短小化が顕在化する蓋杯と、長脚2段3方透かしの高杯を伴う。新相は、やや口径の縮小化が表れ、たちあがりの短小化も進む蓋杯と、長脚2段2方透かしの高杯を伴う。ウィングラス形の深手の器体をもつ台付碗や、有蓋・無蓋ともに透かしを伴わない短脚高杯が出現するのも、新相である。

【Ⅰ期】

須恵器蓋杯（奈文研杯H）の口径縮小化とたちあがりの極短小化、透かしを伴わない短脚無蓋高杯の普遍化に加え、新たな系譜の蓋杯（奈文研杯G）の出現と普遍化、台付碗のバリエーションと出現頻度の増加を指標とする。土師器は、甕を主体とした煮炊具の精製品への刷新、移動式竈の普及、が認められる。また遺跡が限定されるものの、畿内系土師器と基本的属性を共有した在地産土師器杯・鉢・皿が認められるようになる。古相・中相・新相に分けられる。古相は、杯Hのたちあがりが、内傾しつつもまだ比較的长度をとどめており、蓋・身ともに外面に回転ヘラ削りを施すのが基本である。杯Gは、乳頭形もしくはボタン形のつまみと、口縁部より下側に突出するかえりを伴う蓋をもつ。身は深手で、体部中位に沈線を施し、底部幅一杯に回転ヘラ削りを施すことを基本とする。中相は、杯Hにおける回転ヘラ切り不調整の系譜と、回転ヘラ削り調整を継続させる系譜の2者が見られる。新相は、杯Hの口径縮小化とたちあがりの極短小化（ただしバリエーションの幅が一定程度ある）が見られるが、回転ヘラ切り不調整と回転ヘラ削りの2者は引き続き認められる。なお杯Gは、新相をもって消滅する。杯Gは、形態的なバリエーションを増やし、大半でヘラ削りを省略するようになる。

註1 秋山忠・渡部明夫 1977『黒島林第5・6号墳調査報告 香川県観音寺市母神山所在の後期古墳の調査』黒島林古墳群発掘調査団 21～31頁

註2 詳細は近いうちに公表予定であるが、文末で概略を示したように考えているので、参照されたい。

註3 吉留秀敏 1987『福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集 福岡市博多区堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市教育委員会 92～93頁

註4 寺井誠 2012「6・7世紀の北部九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」『第15回九州前方後円墳研究会北九州大会発表要旨・資料集 沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研究会

このほか、以下の文献を参考にした。

高正龍 1996「加耶から新羅へ—韓国陝川三嘉古墳群の土器と葬制について—」『研究紀要 第3号』京都市埋蔵文化財研究所

重見泰 2004「7～8世紀を中心とする新羅土器の形式分類—「新羅王京様式」構築に向けての基礎研究—」『文化財学報 第22集』奈良大学文学部文化財学科

寺井誠 2008「古代難波における2つの瓶を巡って」『大阪歴史博物館研究紀要 第7号』大阪歴史博物館

註5 註1文献 41～73頁

註6 註4重見文献

註7 中西昇 1991『縁塚古墳群Ⅰ—香川県大野原町丸井所在の群集墳の調査—』大野原町教育委員会 23～46頁

註8 註4寺井 2008文献

註9 観音寺市文化財保護協会 1973『観音寺市文化財調査報告 第3号 母神山古墳群千尋支群第1・4・5・6号墳発掘調査概要』観音寺市教育委員会

註10 辻川哲朗 2007「井辺八幡山古墳出土須恵器「耳付杯」の系譜について」『同志社大学考古学シリーズⅨ 考古学に学ぶ（Ⅲ） 森浩一先生傘寿記念献呈論集』同志社大学考古学シリーズ刊行会

註11 森浩一 1972「主要な遺物とその問題」『同志社大学考古学調査報告第5号 井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室

註12 毛利光俊彦 2005『奈良文化財研究所史料第71冊 古代東アジアの金属製容器Ⅱ（朝鮮・日本編）』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

註13 森浩一 註11文献

註14 時代が全く異なるが、丸瓦凹面側縁の削り（切り取り）に近い成形痕である。

註15 削り出し（切り取り）成形は粘土が十分可塑性を保っていた段階で行われ、その後の乾燥が進んだ段階で器面のヘラ削り調整が施されたものと推測される。成形後に自重で耳部が垂れ下がり、水平方向に延びるようになったのであろう。耳部内面に薄く補充粘土の痕跡が見られるのは、耳基部の補強の措置ではないだろうか。

註16 朝鮮半島では百済において3脚付土器が見られる。脚の本数（3本か4本か）は、支える器体（本体）の大きさや形状によって異なると思われ、本数を問題にするよりも「独立した棒状の脚を複数組み合わせる」という発想が、朝鮮半島にあったことを重視した方がよいと考える。

註17 中国・戦国時代中期（紀元前4世紀）の木製槽（湖北省大冶銅緑山遺跡出土）に、「隅丸[長]方形の浅い身の両短辺に斜め方向に延びる長手の耳をつくり出し」たものがあり、「耳杯の祖形を考えるうえに参考になる」とされ、「耳の位置は一般の耳杯と異なるが、槽形の器から」耳杯が出現した可能性が考えられている。

町田彰 1993「戦国時代の耳杯」『論苑考古学』坪井清足さんの古稀を祝う会

ところでその形態は、弥生～古墳時代の槽にも近似しており、弥生文化成立期以後に中国華南地方から朝鮮半島を経由して日本に影響を及ぼした、という可能性も提起できるのではないかと。日本の耳杯形土器と木器槽との形態的差異の起源は、そこまで遡って考える必要があるのかもしれない。

註18 全てが同一の生産地かどうかは、今後の検討課題であるが、系統関係は生産地で完結するとは限らないため、県内で広く事例が見られることに有意性を認めておくことが、現状で重視すべきであろう。

註19 「杯部内面にヘラミガキを加え、外面には放射状暗文様の装飾を施す」

辻川 2007 註10文献

註20 蘭田香融編 1972『和歌山市における古墳文化 晒山、総鋼寺谷古墳群・楠見遺跡調査報告』関西大学考古学研究室紀要第4冊